
小路

楠瑞稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小路

【Nコード】

N6455C

【作者名】

楠瑞稀

【あらすじ】

とある男が小路を見つけた。それは男の心を満たし、人生は一変する。文学っばい何か。

(前書き)

これは作者のHP『飛空図書館』に掲載されている作品と同一のものです。

男は小路を見つけた。

それはいつもの帰り道。十字路の向こう、進行方向とは差し向かいのビルとビルの間ひっそりとあった。

彼は真面目な男だった。毎朝決まった時間に目覚め、決まった道を歩き、決まった列車に揺られ会社へ向かう。

毎日が同じ日々の繰り返し。さして面白みのない平凡な人生ではあったが、縁あって一緒になった妻と子を養うために疑問も抱かずに働いていた。

その道を見かけたのは偶然だった。

普段は急ぎ足で通り過ぎる交差点。靴紐を結ぶ間に変わった信号を待っている時、ふと廻らせた視線の先にその小路はあった。

これまで何年もこの道を通っていたのにも関わらず、その小路の存在に気がついたのはこれが初めてだった。それが意外に思えたので男はその小路をなんとはなしに観察した。

男はあまり目が良くなかったが、その小路の向こうに道路と建物があるのは分かった。

建物はどこか古風であり、道には人通りはない。それは遠い異国の街並みのようで、男は自分の毎日歩く道のすぐ傍らにそんな場所があることをひどく驚いた。

やがて信号が変わり男は早足で会社に向かった。しかし不思議と、その小路のことはいつまでも頭から離れなかった。

男はそれ以来、必ずその小路を気に掛けるようになった。通り過ぎるときにはちらりと視線を投げかけ、信号に足を止めればまじまじと眺める。いつもの道を外れ、その小路に足を踏み入れることは決してしない。しかし小路を見ることだけは毎日欠かすことはなかった。

小路はいつもひっそりとそこにあつた。

晴れた日には景色に沈み込むように、天気の良い日はほのかに光
灯るように。

毎日毎日その小路を眺めているうちに、やがて男は小路の向こう
に憧れを抱くようになっていった。

男の生活は変わらない。

毎日決まった時間に目覚め、決まった道を歩き、決まった列車に
揺られ、会社へ向かう。決まった仕事をこなし、夜になれば急ぎ足
で妻子の待つ家へ帰る。相変わらず小路は眺めるだけであり、自ら
足を向けることは一度としてない。しかし気がつけばいつも、頭の
どこかであの小路のことを考えていた。

あの小路の先はどのような場所なのだろうか。どんな人々が暮ら
しているのだろうか。小路の向こうに人がいるのは見たことがない
ので、きつと本当に静かでひっそりとした通りなのだろう。きつと
あの古風な建物に相応しい異国情緒溢れる街並みが広がっているに
違いない。

実際に見ることができるのは薄汚れたビルとビルの隙間から覗く
僅かな部分だけであつたが、そのことがさらに男の想像をかきた
てた。いや、単調でつまらぬ男の毎日の中で、その空想だけが極彩
色を持つて存在していた。

あの小路の向こう。

そこに存在するだろう自分の知らない街並み。自分の知らない住
人たち。

男の頭の中は、その想像でいっぱいだった。

数年後、世は不況の時代を迎えていた。のどかで平和だった町に
も当然のように不景気の波が押し寄せてくる。

どの業界もまるで極寒の冬に構えるように、出費を抑え人員を整
理し不況の波を乗り越えようと懸命だった。

そんな中、男は会社からクビを言い渡された。

長らく真面目に働いていた男ではあったが、ここ近年仕事をさばる事が多くなっていた。気がつけば物思いにふけており作業の能率も落ちている。どこも苦しい中、生きのびるためには仕事をしない役立たずを切り捨てなければやっていけなかった。

妻も子供も、何を言っても上の空の男にとつくに愛想をつかして出ていっており、男は職も家族もなくひとり世間に放り出されることになった。

しかしそんな身の上になって、男はいつそ晴れ晴れとした気持ちだった。何もかも失ってしまえば、仕事も家庭も自分を縛る枷だったと思えなかった。

ああ、なんて自由なのだろう。

男は嬉しくなった。

ようやくあの小路の向こうに行くことができる。もう決まった毎日を繰り返す必要はないのだ。

会社をクビになった帰り道。男は初めていつもの道を外れ、小路のある歩道へ向かった。期待に胸が高鳴る。さあ、夢にまで見たあの場所だ。

しかし男は小路の前まで来て凍りついた。

息を呑み、言葉もなくなったが呆然と立ち尽くす。

どれだけそこにいただろう。やがて一人の初老の男が傍らのビルから出てきて男に目を留めた。そして意気揚々と声を掛ける。

「その小路よくできているだろう。そいつはな、ビルの持ち主が画家に頼んで描かせただまし絵なのさ」

そう言って初老の男はにやりと笑う。

しかしその言葉が男の耳に届くことはなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6455c/>

小路

2011年9月1日05時16分発行